

兄の分まで生きて



岡田 民雄
おかだ・たみお
[日本ルツボ社長]

実兄の藤崎孝雄は、二〇〇六年九月十日に七十六歳でその生涯を閉じた。

兄は、旧制佐倉中学を卒業してすぐに家業の林業を手伝った。家は代々の地主であったが、その農地は終戦直後に解放されてほとんど失ってしまったが、山林は残されていた。

実家はその山林で木々を切り原木を製材工場に売って生計を立てていた。しばらくして製材工場を入手し、工場のなかに運搬用トラックの修理工場も併設した。

そのうち外部からも車の修理を頼まれるようになり、その商売も始めた。昭和三十年代はじ

めの頃である。

修理工場は活況を呈した。修理工場には、トラックや乗用車だけではなく、ブルドーザーなど建設機械も修理に入ってくるようになった。

兄はまた、ブルドーザーに興味を持ち、当時日本で最大のブルドーザーを手に入れて私にとっても自慢していた。そして兄は土木業に進出した。

どのような経緯だったか私は知らないが、昭和四十年代初めの頃、兄はゴルフ練習場を作った。空港工事関係者などでこの練習場も大いに繁盛した。

あふれたお客が山林の中で勝手に練習するようになって、やがて山林の中には一つ二つとホールが出来ていき、最終的には二十七ホールを備えたミニコース「トーカンゴルフコース」が誕生してしまった。コースは当時のブームに乗って、年間七万人以上の客が入るといふ繁忙ぶりであった。

そして世の中がバブル期を迎え、兄は会員制の本格的なゴルフ場を造ることを決断した。

私も昭和三十五年に入社した日本ルツボを昭和六十二年に一旦辞めて、兄と一緒に「久能カントリー倶楽部」設立の仕事をするようになった。

兄はコース建設、私は主に会員募集に従事した。開場後は、兄は私に総支配人の任を負わせて、自らはコース管理に専念した。兄は様々な事業をこれまで展開したように、時流と景気の動向をいち早く掴む「事業的カノン」が鋭かった。

兄はバブルが崩壊することを予知してゴルフ場建設の工期を短縮させて、鉄入れ式から十七カ月という短期間でオープン（平成元年十一月）できる状態にしたので、会員募集も満足できる条件で出来た。

もし、もう一年オープンが遅れていたなら、募集条件も大幅に変更せざるを得なかったと思う。

兄は事業展開のかたわら、地域への奉仕も積極的に行った。兄は若い頃に母校野球部のコー

チをしていた。当時の選手の一人に長嶋茂雄さんがいた。その関係から長嶋さんは兄の結婚式に出席されて、その日の試合で打ったホームランがプロ入り第一号の記念すべきものとなった。

コーチを退いてからも、兄の母校野球部に対する物心両面での支援は続いていた。バックネットやボールを寄付したり、また野球部員達に焼き肉などをご馳走するのが大好きだった。「ともかく（兄の口癖の枕詞）よく食うぞ！」と言って喜んで

いた。兄の通夜に駆けつけてくれた白いワイシャツ姿の野球部員達に、スポーツシャツ姿の兄の遺影が微笑んでいた。

こうして兄のことを考えていくと、若いときから心身共に全エネルギーを使い果たしてしまっただのかなあとも思う。

兄の冥福を祈ると同時に、私は兄の分まで生きて社会のために役立つっていきたく願っている。